

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXIII) <sup>1</sup>—

茂 木 秀 淳 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード：ハンサ、真実（サトヤ）、ダルマ、ヨーガ、サーンキヤ

[288 章] (B.299 章, C.10992-11036, K.305 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 賢者たちは、この世で、真実、忍耐、自制、英知を称賛する、祖父よ。あなたはこ  
の何をどう考えるか。(Cf.Hara[2000] p.159)

ビーシュマは言った。

- (2) 私は、ここで汝に古譚を語ろう。サーディヤ神たちとハンサの対話を、ユディシュ  
ティラよ。
- (3) 不生にして永遠のプラジャーパティは美しいハンサとなって、三界を廻った。そし  
てサーディヤ神たちに近づいた。

サーディヤ神たちは言った。

- (4) 鳥よ、我々はサーディヤ神たちである。あなたに尋ねたい。あなたに解脱の教えを  
お聞きする。あなたはまことに解脱を知る者である。(Cf.Hopkins[Great Epic]: p.255,  
hypermetric śloka)
- (5) 我々には、あなたは知恵あり、思慮深く語る者と聞こえている。感嘆の声が汝に降  
りそそぐ<sup>2</sup>、鳥よ。あなたは、何を最も優れていると考えるか、再生族よ。あなたの  
心は何に喜びのか、偉大な方よ。(韻律 Upajāti)

<sup>1</sup> 本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXII)—』(信州大学教育学部研究論集第6号 (本号)) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本号で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS. vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Edgerton[1965]: F.Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- 中村 [2000]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(下) 平楽寺書店 2000.
- Hara[2000]: Minoru Hara, Two notes on the word *upaniṣad* in the *Mahā-bhārata*, Studia Indologiczne, 7, Warszawa, 2000, pp.157-167.
- Hara[2001]: Minoru Hara, Hindu Concepts of anger: manyu and krodha, Serie Orientale Roma XCII,1, Rome, 2001, pp.419-444.

<sup>2</sup> P. sādhuśabdaḥ patate B. sādhuśabdaś carate K. sādhuśabdaś carate

- (6) すぐれた鳥よ、もろもろの為すべきことの中で、あなたが最もすぐれていると考え、それを行なえば、人はこの世でのあらゆる束縛から速やかに解放されるものを一つ、我々がなすべきこととして教示すべし、力強い鳥よ。(韻律 Triṣṭubh)

ハンサは言った。

- (7) 甘露を飲む者たちよ<sup>3</sup>、私は、苦行・自制・真実・自己の保護 (ātmaḥvigraha) を為すべきことと聞いている<sup>4</sup>。心のもろもろの束縛を<sup>5</sup>すべて解いて、好ましいことと好ましくないことを自分の支配下へと導くべし<sup>6</sup>。(Cf.Hara[2000]: p.159) (韻律 (Triṣṭubh))
- (8) (他人を) 傷つけてはならない<sup>7</sup>。嘘を言ってはならない。劣った者から、最後のもの (?para) を奪ってはならない<sup>8</sup>。他の者が恐れる不快な<sup>9</sup>地獄に堕ちるような<sup>10</sup>言葉を語るべきではない。(Cf.MBh.I.82.8, Manu Smṛti 2.161) (韻律 Upajāti(?))
- (9) もろもろの言葉の矢は口から飛んで行く。それらに当たった人は日夜悲しむ。それらは、他の人の急所でないところには当たらない。賢者は (pañḍita) それらのことばを他の人々に発すべきではない。(Indische Sprüche, No.6018) (韻律 Upajāti)
- (10) 他の者がかの賢者を過激な言葉の矢でひどく傷つけても (vidhyet), そこでは寂靜こそが為されるべし。(なぜならば) 苛々させられても我慢する<sup>11</sup>者は、他者自身の善行を獲得する (からである)。(韻律 Triṣṭubh)
- (11) (他の人々からの) 罵詈雑言と敵意から<sup>12</sup>引き起こされた苦痛を伴う<sup>13</sup>、燃え上がる怒りを抑え、よこしまならぬ心もち<sup>14</sup>、心喜び、悪意なき者は、他の人々の善行を獲得する。(Cf.Hara[2001]:fn.47) (韻律 Triṣṭubh)
- (12) 怒鳴られても私は何も言わない。叩かれても常に私は耐える。何故ならば、忍耐が<sup>15</sup>、そして真実、正直、思いやりが最もすぐれていると、高貴な人々が言ったからである。(Cf.Hara[2000]:p.159) (韻律 Upajāti(?))

<sup>3</sup>amṛtāsāḥ Cn. amṛtāsāḥ, amṛtabhujāḥ / (amṛtāsāḥとは、甘露を食する者たちである)

<sup>4</sup>P.,B.: śṛṇomi K. śṛṇudhvam

<sup>5</sup>granthin Ca.,Cn.,Cp.: granthin, rāgādin / (「もろもろの束縛」とは、執着などである)

<sup>6</sup>(Deussen は Kātha Up.6.15 の参照を示唆している)

<sup>7</sup>nāruntadaḥ syān Cn. aruntadaḥ, marmacchit / (「傷つける」とは、急所をつく、という意味である) Cs. atidurjanavacanaḥ / (極めつけの悪人の言葉である)

<sup>8</sup>na hinataḥ param abhyadita param の意味がはっきりしない。Cn. param, śāstrarahasyam / (paramとは、秘密の教義である) Ganguli: One should never take scriptural lectures from a person that is mean. Deussen: nicht nehme er das höchste [das Brahmanwissen] von einem Niedrigern an Buitenen (I.82.8): Nor extort the last from a lowly man(vol.1,p.197.19) 上村訳:劣ったものからあまりに多くを奪ってはならぬ(第1巻 p.335)

<sup>9</sup>P. ruśatīm B. uśatīm K. uśatīm

<sup>10</sup>pāpalokyām Cn. pāpalokyām, narakapradām / (「地獄に堕ちるような」とは、地獄をもたらし、という意味である) Cs. narakalokanimittabhūtam / (地獄界の原因となる、という意味である)

<sup>11</sup>P. pratimṛṣyate B.,K.: pratihṛṣyate

<sup>12</sup>P. kṣepābhīmānād B.,K.: kṣepāyamānam

<sup>13</sup>abhiśaṅgavyalikam Cn. ahiśaṅgavyalikam, ahiniveśavaśād apriyam / (abhiśaṅgavyalikamとは、愛着の支配による不快を、という意味である)

<sup>14</sup>P.,K.: aduṣṭacetā B. adṛṣṭacetā

<sup>15</sup>P. hy etat kṣamam apy B.,K.: hy etad yat kṣamam

- (13) ヴェーダの秘密の教え (upaniṣad) は、真実である、真実の秘密の教えは自制である。自制の秘密の教えは解脱である。これが一切の教えである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: p.123; Hara[2000]: p.159)
- (14) 言葉の攻撃 (vega), 心の怒りの攻撃, 所有欲の攻撃<sup>16</sup>, 食欲と性欲の攻撃, これらもろもろの大きな攻撃に耐える人を、私はバラモンと、そして尊者と考える。(韻律 Śālinī(?))
- (15) 怒りなき人は、怒っている人々よりも<sup>17</sup>すぐれている (viśiṣṭa)。忍耐ある人は、忍耐なき人よりもすぐれている。人は人でないものよりもすぐれている。同様に知者は<sup>18</sup>無知な者よりもすぐれている (pradhānaḥ)。(Cf.MBh.I.82.6; Hopkins[Great Epic]: p.289; The Hypermetric Triṣṭubh) (韻律 Triṣṭubh)
- (16) 非難されても非難してはならない。(非難に) 耐える人の怒りが<sup>19</sup>非難する者を焼きつくす。そして(耐える人は)この(非難する)者の善行を獲得するのである。(Cf.MBh.I.82.7)
- (17) 大声で非難されても褒められても (atyuktah), 不快なことも心地よいことも言わない人, あるいは叩かれても、堅固さを保って、叩き返さない人, そしてその叩いた者に罪悪(が生じるの)を望まぬ人, 神々は、常にそのような人をうらやむ。(韻律 Śālinī)
- (18) より劣った者, すぐれた者, そして同等の者から、軽蔑され、叩かれ、非難されても、許すべし。こうして成就 (siddhi) に至るであろう。
- (19) 私は低く見られても<sup>20</sup>常に高貴な人々を敬う。私には所有欲もなく怒りもない<sup>21</sup>。そしてまた私は、ものを得ようと願って道を逸れる (paraimi) ことはない。そして不正に<sup>22</sup>何かに近づくことはない。(韻律 Upajāti)
- (20) 私は呪われても何も呪い返さない。なぜならば自制がこの世における不死の門と知っているから。次に秘密のブラフマン(言葉)を汝に語ろう<sup>23</sup>: 人よりもすぐれたものは何も存在しない。(韻律 Triṣṭubh)
- (21) 月が雲々から離れるように、もろもろの罪悪から開放され、汚れのない堅固な者は、(死の) 時を願いつつ、堅固さによって成就するのである。

<sup>16</sup>P. vivitsāvegā B.,K.: vidhitsuvegā

<sup>17</sup>P.,K.: krudhyatā B. krudhyatā MBh.I.82.6: krodhanebhyo

<sup>18</sup>P.,K.: jñānavān B. jñānavid MBh.I.82.6: vidvāṃs

<sup>19</sup>P. manyur eva B. manyur enaṃ K. manyur evaṃ MBh.I.82.7: mayur eva

<sup>20</sup>nibhṛto 'py N. nibhṛto 'pi pūrṇo 'pi / (nibhṛto 'pi とは、満たされていて、という意味である) Ganguli: Though all my objects are fulfilled. (vol.IXX,p.371) Deussen: wenn ich sie (die Edlen) nicht nötig habe, (p.589)

<sup>21</sup>P. na me vivitsā na ca me 'stī roṣaḥ B.,K.: na me vidhitsuṣahate na roṣaḥ Ca. vidhitsu vyadheḥ rūpam, tāḍaneccchety arthaḥ / (vidhitsu は語根 vyadh の派生語である。打つことを望む、という意味である)

<sup>22</sup>P.,K.: viṣameṇa B. viṣayena

<sup>23</sup>P. vo bravīmi B.,K.: bravīmi (10 syllables) K. は音韻的に不規則な B. と同じ読みをしている。



- (22) 水辺に (? utsecane) 生じた木のように<sup>24</sup>あらゆる人々の尊敬の対象であり、人々がよき称賛の<sup>25</sup>言葉を語る人、このような人は、自己を制御して神々のところに赴く。  
(韻律 Triṣṭubh)
- (23) 詮索する者たちは<sup>26</sup>人のもろもろの性格の中で徳性なきもの (nairguṇyam) を語りがかる。しかし、そのようには、人のもろもろのすぐれた性格は語りがらない。
- (24) 言葉と心を保護し、常に正しく集中し (samyakpraṇihite) た人は、諸ヴェーダ、苦行、棄却、この一切 (の果報) を<sup>27</sup>得るであろう。(Cf.Manu Smṛti 2.160)
- (25) 目覚めた者は、非難されても軽蔑されても、目覚めぬ者によって成長する<sup>28</sup>。それゆえ (目覚めた者は) 他 (の目覚めぬ) 者を増長させるべきではなく (?)<sup>29</sup>、また自分を傷つけてはならない。
- (26) 再生族は<sup>30</sup>、軽蔑を甘露のごとく喜ぶべし。なぜならば、軽蔑された者は安楽に眠るが、軽蔑する者は破滅するからである。(Cf.Manu Smṛti 2.162, 163)
- (27) 怒った者が、祭ろうと<sup>31</sup>、布施しようと、苦行を行おうと、供物を捧げようと、死神ヴァイヴァスヴァタはその一切を奪う。怒る者はむなしく疲労するにすぎない<sup>32</sup>。  
(Cf.Hopkins[Great Epic]: p.304, pāda of rucirā or rucirā-type)(韻律 Upajāti(?))
- (28) 最高の神々よ、性器、腹、両腕、四番目に言葉という四種の門が良く守られている者、その者はダルマを知る者である。(Cf.MBh.XII.261.27)
- (29) 真実、自制、正直、慈悲、堅固、忍耐に専心し、ヴェーダ学習を常とし、他人を妬むことなく、孤独を好む者 (ekāntaśilin) は、上方の世界に赴くであろう。(韻律 UPajāti)
- (30) 仔牛が (母の) 四つの乳房を追いかけるかのように、私は、これらをすべてに行っているが<sup>33</sup>、真実よりも清浄なものは、如何なるものも、どこにも知ることはなかった。

<sup>24</sup>P.K.: utsecane stambha iva B. utsedhanastambha iva Ca. utsecane, jalasāraṇīsamīpe stambho, vṛkṣaḥ / sati seke samvardhate śākhādīsattvāt / (utsecane とは、水の流れの近くで、という意味であり、stambha は木である。散水があると、枝などがあるために (木は) 成長する)

<sup>25</sup>P. suprasastām B., K.: suprasannām

<sup>26</sup>anuyūñjakāḥ Cn. anuyūñjakāḥ, spardhāvantaḥ / (anuyūñjakāḥ とは、嫉妬深い人々のことである)

<sup>27</sup>idaṁ sarvam N. idaṁ sarvam, etasya sarvasya phalam / (「この一切」とは、この (ヴェーダ・苦行・棄却の) すべての果報である)

<sup>28</sup>P. ākrośanāvamānābhyām abudhād vardhate budhaḥ B., K.: ākrośavimānābhyām nābudhān bodhayed budhaḥ

<sup>29</sup>tasman na vardhayed anyam N. na vardhayed na himṣayet / (na vardhayed とは、傷つけるべきではない、という意味である)

<sup>30</sup>P. vai dvijadh B., K.: paṇḍitaḥ

<sup>31</sup>P. yajate B., K.: yajati

<sup>32</sup>P. bhavati B., K.: bhavati hi (12 syllables)

<sup>33</sup>P. sarvān etān B. sarvāṁś cainān K. sarvān vedān N. satyaṁ damaṁ kṣamāṁ prajñām ity upakrāntān vā catuṣṣaṁkhyān / (このすべてとは、真実、自制、忍耐、英知という、あるいは前述 (第 28 詩節か) の 4 という数) N. は、牛の乳房の数にあわせて、「これらすべて」の行為も 4 種とみなしているが、第 29 詩節には「真実」から「孤独を好む」まで 9 種あげられている。

- (31) 人間たち、そして神々の間を行きかっている私は、次のことを言いたい。真実是天界への梯子である。それはあたかも一方の岸から他方の岸へ行く小船のようである。
- (32) 共に住み<sup>34</sup>、尊敬し、その人のようにありたいと望む人々、人はそのような人になるのである。
- (33) もし、人が善き人に仕えるならば、あるいは、悪しき人に仕えるならば、あるいは、苦行者に、あるいは、泥棒に仕えるならば、衣が色に支配されるように、その人は彼らに影響されるであろう。(韻律 Upajāti)
- (34) 神々は常に善き人々と共に語り、人間が対象とするものを見るために赴くことはない。月は同一ではなく<sup>35</sup>、風も同じではない。対象が増減することを知る者が知者である(?)<sup>36</sup>。(韻律 Upajāti)
- (35) 心臓の内部のプルシャ(hṛdayāntarapūruṣa)が汚れなく存在する時、それが善き人々の道にいることに神々は歓喜する。
- (36) いつも性欲と食欲に喜び、絶えず物を盗み、言葉乱暴な者たちを、神々は、彼らが欠点を離れたと知っても<sup>37</sup>、遠くから避ける。(韻律 Upajāti)
- (37) 神々は、何でも食べる、あるいは悪しき行為を行う品位劣った者に満足させられることはない。しかし、真実を誓約とし、知識の完成し、ダルマに喜ぶ者たちと共に、(安楽を)分けあうのである<sup>38</sup>。(韻律 Upajāti)
- (38) 沈黙は言葉よりすぐれている、と言われている。真実を語るならば、その言葉は、(沈黙に続いて)第二(にすぐれている)。ダルマを語るならば、その言葉は第三であり、善きことを語るならば、その言葉は第四である。(韻律 Upajāti)

サーディヤ神たちは言った。

- (39) この世界は何によって覆われているのか<sup>39</sup>、あるいは(人は)なぜ輝かないのか。なぜ友人たちを捨てるのか、なぜ天界に赴かないのか。

<sup>34</sup>P., B.: saṃnivasati K. saṃvivadate

<sup>35</sup>nenduḥ samah syād Cn. indur amṛtamayo 'pi na samah kiṃ tu upacayāpacayadharmā / tathā vāyur apy asama eva, mandamadhyaṃmativrabhedāt / (月は、甘露からなるとしても同一ではない。そうではなくて満ち欠けを性質としている。風も同様に同一ではない。緩慢、中間、猛烈の相違があるから)

<sup>36</sup>uccāvacam viṣayam yaḥ sa veda N. evaṃ sarvaṃ viṣayam uccāvacam upacayāpacayavantam yo veda sa eva veda nānya ity arthaḥ / (このようにあらゆる対象は、uccāvacam、すなわち増減をもつことを知る者、その者こそが知る者であって、他の者ではない、という意味である)

<sup>37</sup>P. apetaḥ saṃnivasati itī tān viditvā, B. apetaḥ saṃnivasati itī tān viditvā K. apetaḥ saṃnivasati itī tān viditvā Cn. apetaḥ saṃnivasati itī tān viditvā, prāyaścittaneti śeṣaḥ / (「欠点を離れた」は、懺悔によって、と補われる)

<sup>38</sup>saṃbhajante N. saṃbhajante sukhaṃ vibhajya sevante / (「共にする」とは、安楽を分けて享受する、という意味である)

<sup>39</sup>kenāyam āvṛto lokah N. evaṃ cet sarve kutah śreya eva nācaranty ity āśayena pricchanti keneti / (もしそうならば、すべての人々はなぜ幸福に至らないのか、という考えによって、「何によって」と尋ねたのである)

ハンサは言った。

- (40) この世界は無知によって覆われている。人は嫉妬のゆえに輝かない。貪欲のゆえに友人たちを捨て、執着のゆえに天界に赴かないのである。

サーディヤ神たちは言った。

- (41) バラモンたちの中でひとり喜ぶ者はいったい誰か。多くの者たちと共にいて満足してひとり座る者は誰か。力がなくとも力があるひとりの者はいったい誰か。これら(バラモンたち)の中で争いに進まないのはいったい誰か。(韻律 *Triṣṭubh*)
- (42) 英知ある者 (*prājña*) が、バラモンたちの中でひとり喜ぶ者である。英知ある者が、多くの者たちと共にいて満足してひとり座る者である。英知ある者が、ひとり力がなくとも力ある者である。英知ある者が、これら(バラモンたち)の中で(ひとり)争いに進まないのである。(韻律 *Triṣṭubh*)

サーディヤ神たちは言った。

- (43) バラモンの神聖さとは何であり、徳は何であると言われるか。彼らの不徳は何か。彼らの人間性は何と考えられるか。

ハンサは言った。

- (44) 彼らの神聖さはヴェーダ読誦であり、徳は誓約と言われる。不徳は非難であり、人間性とは死であると言われる。

ビーシュマは言った<sup>40</sup>。

- (45) 以上が(ハンサと)サーディヤ神たちとのよく知られたすぐれた対話である。まことに身体は<sup>41</sup>もろもろの行為の源であり、真実とは正しいあり方(?)性<sup>42</sup>である、と言われている。

#### [289 章]<sup>43</sup>(B.300 章, C.11037-11098, K.306 章)

ユディシュティラは言った。

<sup>40</sup>K. はこの後に以下の2詩節を挿入している。

ity uktvā paramo devo bhagavān nitya avyayaḥ /  
sādhyaḥ devagāṇiḥ sārdaḥ divam evāruroha saḥ //  
etad yaśasyamāyusaḥ puṇyaḥ svargāya ca dhruvam /  
darśitaḥ devadevena paramaṇāvayayena ca //

<sup>41</sup>kṣetraṁ vai Ca. kṣetraṁ, śarīram / (kṣetra とは、身体である) Cn. sthūlasūkṣmabheda dvividham / (粗大さと微細さとの相違によって(身体は)2種類である)

<sup>42</sup>sadbhāvaḥ satyam N. sadbhāvaḥ sattāmātram / (sadbhāva は、実在性のみを意味している) Deussen: das [ewig] Reale ist die Wahrheit. (p.592) Ganguli: existence or Jiva is truth. (vol.IX, p.373)

<sup>43</sup>289 章 vv.1-41 は Edgerton の英訳がある。Cf. Edgerton[1965]: pp.291-294

- (1) サーンキヤとヨーガの相違を私に語るべし。一切知者よ<sup>44</sup>、あなたはすべてを知るが故に、クル族のすぐれた者よ。

ビーシュマは言った。

- (2) サーンキヤに従う者たちはサーンキヤを称賛し、ヨーガに従う再生族たちはヨーガを称賛する。(両者とも) 自分の立場の高揚のために<sup>45</sup>種々の方法を用いて<sup>46</sup>(自分の)卓越性を語る。
- (3) 自在神をもたぬものが<sup>47</sup>どうして解脱できようか、とこのように、英知あるヨーガに従う者たちは、種々の手段を用いて(ヨーガの)卓越性を正しくするのである、敵を悩ます者よ。(Cf.YS.1.23)
- (4) サーンキヤに従う再生族たちは、(サーンキヤの) 手段 (kāraṇa) を以下のように正しく語る。この世界のあらゆる状態を (gatīḥ) 認識して、もろもろの対象に執着のなくなった者は、
- (5) 身体(を離れた)後に確実に (suvyaktam) 解脱するであろう。それ以外にはない、と。このように、偉大な英知ある者たちは、解脱の教義であるサーンキヤを説いたのである。
- (6) (両者の説く解脱の) 手段は、それぞれの立場において (svapakṣe), 有力で<sup>48</sup>有効な説として受け入れられるべし。識者たちの考えは、識者に尊敬される汝のごとき人々によって受け入れられるべきであるから。
- (7) ヨーガに従う者たちは、直接知覚に基き、サーンキヤに従う者たちは、聖典を決定者としている。私は、この両者とも、真実であると考え、友よ、ユディシュティラよ。
- (8) この両者とも識者によって認められる知識であると考えられる、王よ。教義のとおり (yathāśāstram) 実行されたならば、最高の境地に導くであろう。

<sup>44</sup>P. sarvajña B.,K.: dharmajña

<sup>45</sup>svapakṣodbhāvanāya vai Cv. (reading bhāvanād bhāvanāya vai) bhāvanāt, ihalokabhāvanāt dhyānāt / bhāvanāya, paralokabhāvanāya / (bhāvanāt とは、この世界における修習によって、すなわち、瞑想によって、という意味である。bhāvanāya とは、他の世界における修習のために、という意味である)

<sup>46</sup>P. kāraṇaiḥ B.,K.: kāraṇam

<sup>47</sup>anīśvaraḥ Deussen: einer ohne Gott Ganguli: one that does not believe in the existence of God 中村 [2000]: 無神論者 Edgerton[1965]: the soul (cf. p.291, fn.1) N. ato mokṣapradatā īśvaro 'vaśyam astīti jñeyam iti yogānām yuktiḥ / (「それ故、自在神は、解脱をもたらす者として、必然的に存在する、と認識すべきである」というのが、ヨーガに従う者たちの論理である) 疑問詞 katham に optative が用いられていることから、この部分は反語表現と理解できる。Edgerton[1965] のように anīśva を靈魂と解すると、「靈魂はどうして解脱できようか」となつて人の解脱の可能性が否定されてしまう。

<sup>48</sup>P.,K.: samartham B. samarthe



- (9) 精神集中による<sup>49</sup>清浄さ、生き物たちに対する慈悲は両者とも同じである、罪なき者よ。誓約の保持も同じであるが、見解 (darśana) は同一ではない<sup>50</sup>。

ユディシュティラは言った。

- (10) もし、誓約も清浄さも慈悲も同じであるなら、祖父よ<sup>51</sup>、なぜ見解も同一にならないのか。それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (11) 執着、迷盲、愛情、愛欲、そして最後に怒り、ヨーガによってまずこの五種の欠点を<sup>52</sup>断って<sup>53</sup>、人々はその (境地) を (?) 獲得する<sup>54</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: p.181, five faults of a yogi; pp.108-110, 289 章 vv.11-62 の要約)
- (12) 大きな魚たちが<sup>55</sup>網を破って、再び水を得るのと同様に、ヨーガ行者たちは<sup>56</sup>汚れを除いて、その境地 (tatpadam) を得るのである。
- (13) 力ある獣たちが畏を<sup>57</sup>破って、あらゆる束縛から解放され、障害のない道 (? vimalam mārgam) を得るのと同様に、
- (14) 力あるヨーガ行者たちは<sup>58</sup>、王よ、貪欲より生じた束縛を断って、汚れを離れて<sup>59</sup>、吉祥な最高の道を行くのである。
- (15) 他の力なき獣たちが畏にかかって死ぬのは疑いがない。(ヨーガ行者たちは) ヨーガの力がなければ、それと同様となるのは疑いない。(Cf.Hopkins[1901]: p.349)
- (16) クンティーの子よ、網に入った大魚たちは (jhaṣāḥ) 力がなければ死ぬ<sup>60</sup>ように、すぐれた王よ、力の大変弱いヨーガ行者たちも同様である<sup>61</sup>。(Cf.Hopkins[1901]: p.349)

<sup>49</sup>P. tayor yuktaṁ B. tapoyuktaṁ K. tayor ekaṁ

<sup>50</sup>K. は次に以下の行を挿入している。

tayos tu darśanaṁ samyak suukṣmābhāve prasajyate /

<sup>51</sup>P. pitāmaha B.,K.: phalaṁ tathā

<sup>52</sup>(doṣaṁ pañcāitān 五種の yogadoṣa は、MBh.XII.232.4, 266.14 には愛欲 kāma, 怒り krodha, 貪欲 lobha, 恐怖 bhaya, 眠り svapna の五種が挙げられている。ここの五種とは一致しない。

<sup>53</sup>P. chittvadito B.,K.: chittvā tato

<sup>54</sup>P.,B.: prāpnuvanti tat K. prāpnuvanti te Deussen: jene Frucht, Edgerton: that Absolute Ganguli: Emancipation 第 12 詩節 cd に prāpnuvanti ...tat padam とあることから、padam を補った。

<sup>55</sup>cānīmīṣāḥ Ca.,Cn.,Cs. anīmīṣāḥ, matsyāḥ / (瞬きしない者たちとは、魚たちである)

<sup>56</sup>yogās Cn. yogaśabdo 'tra prāyeṇa matvarthīyo 'cpratyayāntaḥ (Pāṇini 5.2.127) yogiparaḥ prakaraṇāj jñeyaḥ / (yoga という語は、普通、所有を意味する ac 接辞 (母音) を語尾にもっているの、ここではヨーガ行者 yogin が意味されていると文脈から理解されるべし)

<sup>57</sup>vāgūrāṁ Ca.,Cn.: vāgūrāṁ, pāśavatiṁ snāyurajjum / (vāgūrāṁ とは、獣のための畏の綱を、という意味である)

<sup>58</sup>P.,B.: yogāḥ K. yogāt

<sup>59</sup>P. vimalāḥ B.,K.: vimalaṁ

<sup>60</sup>P.,K.: antaṁ gacchanti B. vadhāṁ gacchanti

<sup>61</sup>P. tathā yogāḥ B.,K.: yogās tadvat



- (17) 鳥たちが細かな網に達した時 (pr̥ya), 敵を殺す者よ, そこで捕われた者たちは死に, 力ある者たちは解き放たれるように,
- (18) それと同様に, 行為より生じたもろもろの束縛によって縛られたヨーガ行者たちは, 力なければ死に, 力あれば解放されるのである, 敵を苦しめる者よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.349)
- (19) 力の弱い小さな火は, 大きな薪を乗せられると消える。力なきヨーガ行者も同様である, 威力ある者よ。
- (20) その同じ火が風と結びついて<sup>62</sup>, 再び力を得れば, 王よ,, 瞬時に全大地でさえも焼くであろう。
- (21) それと同様に, 力が生じ, 燃え上がる熱力 (tejas) をもち, 強大な力をもつヨーガ行者は, あたかも (世界) 終末時における太陽のごとく, 全世界を干上がらせるであろう。
- (22) 力なき人が川の流れにさらわれるように, 王よ, 力を失って (対象を) 支配できないヨーガ行者は, (感官の) もろもろの対象によって連れ去られるのである。
- (23) 象が同じその流れを<sup>63</sup>押し止めるように, それと同様に, ヨーガ行者は, ヨーガの力を獲得して, 多くの対象を粉々にするのである<sup>64</sup>。
- (24) 支配されない<sup>65</sup>, ヨーガの力をそなえたヨーガ行者たちは<sup>66</sup>, 自在に (īśvarāḥ), プラジャーパティたち, 聖仙たち, 神々, そしてもろもろの大元素に入り込むのである, 王よ。
- (25) ヤマも, 怒ったアンタカ (終末をもたらす者) も, 足取りの恐ろしい死も, これらのすべては, 王よ, 量り知れぬ威力 (amitatejas) をもつヨーガ行者を支配することはない。
- (26) ヨーガ行者は, (ヨーガの) 力を得て, パーラタ族の雄牛よ, 何千という自分 (の身体) を作り, そのすべてと共に地上を行くであろう。(Cf.Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya 1.3.27)

<sup>62</sup>P.,K.: samīraṇayutaḥ B. samīraṇagataḥ

<sup>63</sup>P. yathā sroto B.,K.: mahāsroto

<sup>64</sup>vyūhate Cn. vyūhate, vikṣipati tucchikaroti / (vyūhate とは, 投げ捨てる, 粉々にする, という意味である) Cv. vyūhate, virodhitayā tarkayati / (vyūhate とは, (対象を) 対立するものとして構想する, という意味である)

<sup>65</sup>avaśāḥ Cn. avaśāḥ, svatantraḥ / (「支配されない」とは, 独立している, という意味である) Cv. avaśāḥ, viṣṇuvaśāḥ, mṛtyor avaśā vā / (「支配されない」とは, ヴィシュヌ神の力をもつ, あるいは死に支配されない, という意味である)

<sup>66</sup>P. yogā B.,K.: yogād

- (27) (ヨーガ行者は)<sup>67</sup>もろもろの対象を得るであろう。そして再び恐ろしい苦行を行うであろう。そして、王よ<sup>68</sup>、再び(何千という自分たちを)収束するであろう<sup>69</sup>。あたかも太陽がもろもろの光の糸を<sup>70</sup>束ねるかのように。(Cf.Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya 1.3.27)
- (28) 力の中に住し、束縛を支配した<sup>71</sup>ヨーガ行者には、王よ、解脱の支配者という性質が<sup>72</sup>生じる。このことは疑いない。
- (29) ヨーガにおけるもろもろの力は、このように私によって述べられた<sup>73</sup>、人々の主よ。さらに微妙な(sūkṣmāni)もろもろの力を、例をあげて(nidarśārtham)汝に述べるであろう。
- (30) 瞑想における自己の凝念(dhāraṇā)に関して<sup>74</sup>、卓越した者よ<sup>75</sup>微妙な(もろもろの力の)例示を私から聞くべし、パーラタ族の雄牛よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.350, smādhāna)
- (31) 矢を射る者が、注意深く集中して的を射るように、ヨーガ行者は、正しく心を集中して、解脱を得る。(このことに)疑いはない。
- (32) 人が、(頭の上の)油の満ちた器に<sup>76</sup>心を動かさずに集中して、集中した心をもって抑制して<sup>77</sup>梯子を登るように、(cf.MBh.XII.304.22 油の器の比喩)
- (33) そのようにヨーガ行者は、王よ、(心を)動かさずに自己に集中して<sup>78</sup>、自己を太陽のごとき汚れなき姿にするのである。
- (34) 船頭が、心を集中して、クンティーの子よ、大海にある船を素早く(港の)町に導くように、王よ<sup>79</sup>、
- (35) そのように、真理を知る者は、ヨーガによって自己の瞑想に集中して、この身体を捨てた後、到達しがたい境地に達する。(Cf.Hopkins[1901]: p.350, samādhī)

<sup>67</sup>P. caiva B.,K.: kaścīt

<sup>68</sup>P. pārtha B. tāta

<sup>69</sup>saṃkṣīpet Edgerton[1965] and he may assemble these (selves) again (in himself)

<sup>70</sup>P.,B.,K.: tejoguṇān Śāṅkara Bhāṣya rāsmigaṇān

<sup>71</sup>bandhaneśasya Cs. bandhaneśasya, kāmādinīyamanasamarthasya / (「束縛を支配した者」とは、愛欲などの抑制に能力のある者である) Cv. bandhane karaṇānām vīgrāhe, īśasya samarthasya / (束縛において、すなわち諸器官の孤立化において、「支配」すなわち能力のある者が、という意味である) N. bandhaneśasya, bandhanam chetum samarthasya / (「束縛を支配した者」とは、束縛を断ち切ることのできる者が、という意味である)

<sup>72</sup>P. vimokṣaprabhaviṣṇutvam B., K.: vimokṣe prabhaviṣṇutvam

<sup>73</sup>P. yoge proktāni B.,K.: yogaprāptāni

<sup>74</sup>samādhāne dhāraṇām prati Cn. dhāraṇā, nābhyādyanyatamadeśe cittasya sthīrikaraṇam / (「凝念」とは、臍などいずれか一つの場所に、心を留めることである) Cf.YS 2.29

<sup>75</sup>P. cābhibho B.,K.: vā bibho

<sup>76</sup>snehapūrṇe yathā pātre Cn. pātre, śīrasi dhṛte / (「器に」とは頭上で保持された器において、という意味である) Edgerton[1965]: a pot full of oil (carried in his hands) (p.204)

<sup>77</sup>P. yatta B.,K.: yukta

<sup>78</sup>P. yuktavā B.,K.: yuktas

<sup>79</sup>P.,K.: pārthiva pāttanam B.: pārthivasattama

- (36) たとえば、御者が、よき馬たちをつなぎ、心を集中して、弓の射者をすばやく望む場所に連れて行くように、雄牛のごとき人よ、
- (37) そのように、王よ、もろもろの凝念 (dhāraṇā) に集中したヨーガ行者は、すばやく最高の境地に達する。あたかも射られた矢が的に達するかのごとく。(Cf.Hopkins[1901]: p.350, smādhi, dhāraṇā)
- (38) 自己を自己に帰入せしめて<sup>80</sup>、不動のヨーガ行者は、魚たちを殺す者が罪を得るかのように<sup>81</sup>、不老の境地に達する。
- (39) 臍、喉、頭、心臓、胸、両脇、視覚、触覚、嗅覚において、無量の力をもつ者よ、
- (40) 偉大な誓約に集中し<sup>82</sup>、これらの部位に自ら微細な自己を正しく結びつけるヨーガ行者は、人々の主よ、
- (41) 汚れなき英知をもち<sup>83</sup>、たちまちに善悪の行為を焼いて、最高のヨーガに至り、望む時に解脱するのである<sup>84</sup>。

ユディシュティラは言った。

- (42) ヨーガ行者は、いかなる食べ物を取り、何に打ち勝って、バーラタ族よ、力を得るのか、それを貴方は私に語るべし。(Cf.Hopkins[1901]: p.350, yoga power, bala)

ビーシュマは言った。

- (43) 穀物を食べるのに専心し、そして搾り粕 (piṇyāka) を食べるのに (専心し)<sup>85</sup>、もろもろの油質の類を避けるのに専心するヨーガ行者は力を得るであろう。

<sup>80</sup>P. āveśyātmani cātmanam B.,K.: āveśyā... Cn. ātmani ātmānam praveśya, vṛttisārūpyam tyaktvety arthah / (「自己を自己に帰入せしめて」とは、類似したあり方を捨てて、という意味である)

<sup>81</sup>P. pāpaṃ hanteva mīnānam B.,K.: pāpaṃ hanti punītānam Ca. pāpo hanteva mīnānam iti / yathā pāpaṃ pāpācāro hiṃsārucir mīnānam padaṃ sthānam prāpnoty ekacittah / (「魚たちの悪しき殺害者のように」とは、悪しき者、すなわち悪行を行う者、すなわち魚たちの殺生に一心にふける者は、魚たちの境地、すなわち状態に達する、そのように、という意味である)

<sup>82</sup>mahāvratasamāhitaḥ Cs. mahāvratam, brahmacaryam / yadvā, mahāvratāni sanatsujātaktāni(5.43.12), jñānam ca satyam ca tapaḥ śrutam cetyādini / (「偉大な誓約」とは、梵行である。あるいは、サナトスジャータによって述べられた、知識・真実・苦行・聴聞を始めとする、もろもろの偉大な誓約のことである) (MBh.V.43.12 には Sanatsujāta によって 12 種の mahāvratā が述べられているが、12 種の中には jñāna は含まれていない。)

<sup>83</sup>P. amalaprajñah B.,K.: acalaprakhyam

<sup>84</sup>yadicchatī vimucyate Cn. yadicchatī yoginaḥ svecchayā brahmalokādau gamanam, videhakaivalyam, dehadhāraṇam ceti darśitam / (「望む時に」とは、ヨーガ行者が自らの願望によってブラフマンの世界に行くこと、すなわち身体なき独存と身体の保持とが示されている) Cp. yadicchatī tadā vimucyate, nocet tāny eva bhūkte, iti bhāvaḥ / (望むならば、その時に解脱する。そうでなければそれら (ヨーガの力か?) を楽しむ、という意味である) Cs. kalpāvasānam tasya jīvitum śaktir astīti sūcitam / (彼には劫の終わりに生きる能力がある、ということが示されている)

<sup>85</sup>P. ca bhakṣaṇe B.,K.: ca bhārata

- (44) 長い間、乾燥した麦を<sup>86</sup>食べ、日に一人を楽しみ<sup>87</sup>清浄な自己をもつヨーガ行者は力を得るであろう、敵を制圧する者よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.350)
- (45) 半月間、一月間、そして種々の季節の間、洞穴を放浪しつつ<sup>88</sup>、牛乳の混ざった水を飲むならば (pītvā)、ヨーガ行者は力を得るであろう。(Cf.Hopkins[1901]: p.350)
- (46) あるいは、いつもまる一月間<sup>89</sup>正しく断食して<sup>90</sup>、清浄な自己をもつヨーガ行者は力を得るであろう、人々の支配者よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.350)
- (47) 愛欲に打ち勝ち、そして、怒りに、寒暑に、雨に、恐れに、眠りに<sup>91</sup>、息切れに、人間的な事に<sup>92</sup>、そしてもろもろの対象物に打ち勝って、(cf.Hopkins[1901]: pp.350-351)
- (48) 打ち勝ちがたい怠惰に<sup>93</sup>、恐ろしい渴愛に、王よ、あらゆる(感官の)接触到<sup>94</sup>、そして打ち勝ちがたい眠気に(打ち勝って)、すぐれた王よ、(cf.Hopkins[1901]: p.350)
- (49) 偉大な者たちは、執着なく、偉大な英知をもち、禅定とヴェーダ学習を身につけ、自らによって微細なアートマンを輝かせるのである。(Cf.Hopkins[1901]: p.351, yogin-mahātman, vītarāga)
- (50) この道は、学識あるバラモンにとっても行くのが難しいと考えられる<sup>95</sup>。誰もこの道を楽に進むことはないのである<sup>96</sup>、バーラタ族の雄牛よ。(Cf.Hopkins[1901]: p.351)
- (51) それはあたかも、誰か若者が、蛇や蜥蜴のたくさんいる恐ろしい森を、穴があき、水はなく、進みがたく、刺の多い森を、
- (52) (そして)食物もなく<sup>97</sup>、森林が多く、火で焼けた樹木からなり、盗賊の群れる道を、楽に(に進むか)のようである<sup>98</sup>。

(53) ヨーガの道に近づいて、(ヨーガの道に)入る<sup>99</sup>再生族で、簡単に道をあきらめる者

<sup>86</sup>yāvakaṃ rūkṣaṃ Cs. yāvakaṃ, yavāṇaṃ, rūkṣaṃ tailaghr̥tādirahitam / (「乾燥した麦」について、麦とは茹でた麦である。「乾燥した」とは油やバターなどを欠いている、という意味である)

<sup>87</sup>P. ekārāmo B., K.: ekāhāro ekārāma は、Yājñavalkya Smṛti 3.58 (Nirṇaya Sāgara 版 p.366) に yati-dharma として挙げられている。

<sup>88</sup>P. pakṣān māsān ṛtūṃś citrān saṃcaramś ca guhās tathā B., K.: pakṣān māsān ṛtūṃś caitān saṃvatsarān ahas tathā

<sup>89</sup>P. māsaṃ B., K.: māmśaṃ

<sup>90</sup>upoṣya Cn. upoṣya, tyaktvā / (「断食して」とは、(肉 māmśa を) 捨てて、という意味である)

<sup>91</sup>P. nidrām B., K.: śokaṃ

<sup>92</sup>P. pauraṣaṃ B., K.: pauraṣān

<sup>93</sup>aratim Cp. aratim, ālasyam / (arati とは怠惰である)

<sup>94</sup>P. sparśān sarvāṃś B., C., K.: sparśaṃ nidrām

<sup>95</sup>P., K.: mataḥ panthā B. mahāpanthā

<sup>96</sup>P., K.: na kaścīd vrajati hy asmin kṣemeṇa B. yaḥ kaścīd vrajati hy asmin kṣemeṇa B. の読みならば、次の 51, 52 詩節とつながる。すなわち、「この道を喜んで進む者は、あたかも、若者が、喜んで、以下のような (51, 52 詩節に描写されるような) 進むに困難な道を行くが如しである」という意味になろう。P. のように読むと、kṣemeṇa が、第 50 詩節では na と連動して「誰も楽に進めない」と否定的になるが、第 51, 52 詩節では、否定辞がないので反対に「楽に進む」となる。

<sup>97</sup>P. abhaktam C. abhakSam

<sup>98</sup>kṣemenābhipated yuvā P.50c のように na kaścīd vrajati hy asmin kṣemeṇa と読むと、kṣamena hi pated yuvā (「若者が辛抱して進むかのように」と読む G1 写本の読みがわかりやすい。

<sup>99</sup>P. bhajate B., C., K.: vrajate



は、罪多きもの (bahudoṣa) と伝えられている。(Cf.Hopkins[1901]: p.351, bahudoṣa)

- (54) 大地の主よ、鋭い剃刀の上に立つのはたやすい、大地の王よ。しかし、しかし自己の完成していない人々が、ヨーガの凝念 (dhāraṇā) に住するのは難しい<sup>100</sup>。(Cf.Hopkins[1901]: p.351)
- (55) 誤った凝念は、清浄ならざる (naśubhaṃ) 道に導く。海で水先案内人のいない船が人々を海に導くかのように、王よ。
- (56) しかし、クンティーの子よ、規範どおりに凝念に住する者は、生死、苦楽を解き放つのである (vimuñcati)。
- (57) 以上述べられたことは、ヨーガの種々の聖典に述べられている。(cf.YS 1.1 atha yogānuzāsanam) しかし、完全な最高のヨーガは<sup>101</sup>、再生族において定まっている。
- (58) すなわち、偉大にして至高なるかのブラフマンに、偉大な者よ<sup>102</sup>、支配者ブラフマー神に、恩寵を与えるヴィシュヌ神に、シヴァ神に、ダルマに、六面の神 (ヴァルナ) に、六人のブラフマー神の息子に<sup>103</sup>、偉大な子孫たちに<sup>104</sup>、(韻律 Upajāti)
- (59) 悪しきタマスに、強大なラジャスに、清浄なサットヴァに、最高のプラクリティに、ヴァルナの妻である女神シッディに<sup>105</sup>、全威力に、強大な堅固さに、
- (60) 清浄な星を伴う人々の王に<sup>106</sup>、ヴィシュヴァデーヴァ神、蛇たちに、祖霊たちに、すべての岩々に、恐ろしい大海たちに、すべての川に、水を保つ (savanān) 雲たちに、(韻律 Upajāti)
- (61) 蛇に、山に、夜叉の群れに、方位に、ガンダルヴァの群れに、男に、女に、偉大な大きな自己をもつヨーガ行者は、順番に<sup>107</sup>到達して入り込むであろう。そして時をおかずに (nacirāt) 解脱するであろう。(韻律 Upajāti)

<sup>100</sup>同音の (kṣura)dhārā と dhāraṇā が対比されている。同じ dhārā でも一方は簡単で、他方は困難という対比になっている。

<sup>101</sup>P. param yogaṃ tu yat kṛtsnam B.,K.: param yogasya yat kṛtyam

<sup>102</sup>P. param hi tad brahma mahan mahātman B.,K.: param hi tad brahmamayaṃ mahātman Cv. (reading param mahad brahma mahan mahātman) he mahātman yudhiṣṭhira, param uttaram, tat yogakauśalākhyam brahma vedaḥ / yogasya vedasāratvād vedatvam / (he mahātman とは、ユディシュティラよ、という意味である。param とは最高者という意味である。それは、ヨーガに通じたる者と呼ばれるブラフマンであり、ヴェーダである。ヨーガはヴェーダの核であるから、ヴェーダである)

<sup>103</sup>P.,K.: ṣaḍbrahmaputrāḥ B. yadbrahmaputrāḥ Cs. ṣaḍbrahmaputrāḥ, marīcyatryaṅgirasapulastapulahakratur iti sambhavarparvaṇy uktāḥ (MBh.I.59.10) / (「六人のブラフマー神の息子」は、マリーチ、アトリ、アングラス、プラスタ、プラハ、クラトゥであると、起源の章において述べられている)

<sup>104</sup>mahānubhāvān Cn. mahānubhāvān, ṛṣabhakapilādīn / (「偉大な子孫たち」とは、リシャバ、カピラなどである)

<sup>105</sup>varuṇasya patnīm Cp. varuṇasya patnīm, varuṇyattām siddhim / (「ヴァルナの妻」とは、ヴァルナに依存するシッディである)

<sup>106</sup>P. narādhipaṃ vai vimalaṃ satāraṃ B.,K.: tarādhipaṃ khe vimalaṃ satāraṃ

<sup>107</sup>P.,B. parasparam K. parāt param

- (62) この吉祥な話は<sup>108</sup>，専ら大威力の知をもつ神について<sup>109</sup>のものである，王よ。偉大なヨーガ行者は，すべての死すべき者たちを征服し，ナーラーヤナ神を本性とするものとなって<sup>110</sup>，もろもろのヨーガを<sup>111</sup>行うであろう (kurute)。(韻律 Upajāti)

<sup>108</sup>kāthā Cn. kathā, jagatkarṭṛkādinirupaṇātmikā / (話とは，世界創造者などの描写を本質とする話である)

<sup>109</sup>P.,B.: deve mahāvīryamatau K. deve mahāvīryatamau

<sup>110</sup>nārāyaṇātmā, Cv. nārāyaṇātmā, nārāyaṇaḥ ātmā cittaṃ yasya saḥ, yogaṃ kurute iti yojanā / (nārāyaṇātmā とは，そのātman すなわち心が nārāyaṇa である者，その者がヨーガを行う，という構文である)

<sup>111</sup>P. yogān B.,K.: yogī B.,K. の yogī ならば，kurute の主語が明確になるが，目的語がはっきりしない。N. は kurute saṃkalpamātreṇa sṛjati(願望のみによって創造する)と注解している。